

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（26）

県単道路整備（改良）工事（倉園地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

倉園C遺跡

1996年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会



倉園C遺跡遠景



倉園C遺跡近景

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と称される通り、縄文時代の遺跡を中心に前川、安楽川沿いに約200ヶ所の周知の遺跡があります。

これらの遺跡は、農業基礎整備事業あるいは宅地開発等の開発行為により、確認調査が実施され、貴重な資料を提供するとともに遺跡の性格が解明されつつあります。

この報告書は、県単道路整備（改良）工事に先立ち、計画地区内に所在する倉園C遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり発掘を担当された調査員をはじめ指導者、作業協力者の皆様、また調査に御協力いただいた土地所有者をはじめ作業員の皆様、並びに関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

志布志町教育委員会

例　　言

1. この報告書は県単道路整備（改良）工事（倉園地区）に伴う倉園C遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県土木部（大隅土木事務所）からの委託事業として志布志町（志布志町教育委員会）が受託し、調査主体となり実施した。
3. 調査における実測および測量、写真撮影は、小村が行った。
4. 調査の実施にあたっては、鹿児島県教育庁文化課の指導・教示を受けた。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 遺物番号については、通し番号とし、挿図、図版とも一致している。
7. 出土遺物は志布志町教育委員会で一括保管し公開展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は小村が行った。

本文目次

序文

例言

目次

第 I 章 調査の経過	
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の経過と概要	7
第 II 章 遺跡の位置・環境および周辺遺跡	
第 1 節 遺跡の位置・環境	4
第 2 節 周辺遺跡	5
第 III 章 各トレンチの調査	7
第 IV 章 発掘調査	14

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	6	第2表 出土土器観察表	26
--------------	---	-------------	----

挿入目次

第1図 周辺の遺跡	6	第11図 II類土器実測図(2)	17
第2図 土層柱状模式図	7	第12図 II類土器実測図(3)	18
第3図 トレンチ・発掘調査配置図	8	第13図 III類土器実測図(1)	19
第4図 トレンチ断面図・平面図	9	第14図 III類土器実測図(2)	20
第5図 トレンチ出土遺物(1)	11	第15図 IV類土器実測図(1)	21
第6図 トレンチ出土遺物(2)	12	第16図 IV類土器実測図(2)	22
第7図 トレンチ出土遺物(3)	13	第17図 V類土器実測図(1)	23
第8図 畦畔断面図	15	第18図 V類土器実測図(2)	24
第9図 遺物出土状況平面図	15	第19図 石器実測図(1)	25
第10図 I・II類土器実測図	16	第20図 石器実測図(2)	26

図版目次

図版 1 確認調査風景	30	図版 5 出土遺物	34
図版 2 発掘調査風景	31	図版 6 出土遺物	35
図版 3 出土遺物	32	図版 7 出土遺物	36
図版 4 出土遺物	33		

報告書抄録

ふりがな	くらぞの いせき					
書名	倉園C遺跡					
副書名	県単道路整備(改良)工事(倉園地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	(26)					
編集者名	小村美義					
編集機関	鹿児島県志布志町教育委員会					
所在地	鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542					
発行年月日	1996年3月29日					
ふりがな	くらぞの いせき					
所収遺跡名	倉園C遺跡					
ふりがな	かごしまけんそおぐんしぶしちょううちのくらくらぞの					
所在地	鹿児島県曾於郡志布志町内之倉倉園					
調査期間	19960123~19960208(確認調査) 19961116~19961205(発掘調査)					
調査面積	30m ² 200m ²					
調査原因	県単道路整備(改良)工事					
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	出土量	特記事項
倉園C遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器片 縄文石器	5ケース 1ケース	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、各関係機関との間で、事業地区内における有無及びその取扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部（道路維持課・大隅土木事務所）は、志布志町倉園地内における県単道路整備（改良）工事（主要地方道・日南～志布志線）の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、県文化課に照会した。この結果、当該事業区域内に倉園C遺跡が存在していることが判明した。

これを受けて県文化課並びに大隅土木事務所と志布志町教育委員会の三者で協議した結果、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための緊急確認調査を平成7年度に実施することとなった。

確認調査の結果、縄文時代早・前・後・晩期の土器・石器が出土し、この時代の遺物包含層が存在していることが判明した。

これを受けて大隅土木事務所と志布志町教育委員会で協議し、設計変更不可能な道路拡幅部分については、平成8年度に緊急発掘調査を実施することとなった。

志布志町教育委員会が調査主体となり、県文化課並びに県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得て実施した。

第2節 調査の組織（確認調査・発掘調査）

調査主体者	志布志町教育委員会	教育長	徳重俊二
調査責任者	タ	社会教育課長	吉松弘文
調査調整	タ	課長	井手南海男
調査事務	タ	係長	新村千秋
	タ	主事	天野和博
	タ	主事	淵之上純子
	タ	主事	小村美義
	タ	主事補	坂元正知
調査担当者	タ	主事	小村美義

第3節 調査の経過

◎確認調査は、平成7年1月23日から2月8日まで実施した。その間の調査の経過と概要については日誌抄をもってかえる。

- 1月23日（月） 用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。資材テント部分の伐採作業。1～5トレンチ設定。1～3トレンチ掘り下げ開始。1，3，4トレンチ位置平板実測。
- 1月24日（火） 1～3トレンチ掘り下げ。1，3～5トレンチ海拔高設定。1トレンチ完掘。
- 1月25日（水） 2～4トレンチ掘り下げ。2，5トレンチ位置平板実測。3トレンチ遺物出土状況平板実測。遺跡遠景写真撮影。
- 1月26日（木） 2～4トレンチ掘り下げ。1トレンチ土層断面線引き及び完掘状況写真撮影。3トレンチのピット（柱穴？）写真撮影。
- 1月27日（金） 2～4トレンチ掘り下げ。2トレンチ海拔高設定及びトレンチ位置平板実測。
- 1月30日（月） 2～4トレンチ掘り下げ。3トレンチ遺物出土状況平板実測。
- 1月31日（火） 2，4，5トレンチ掘り下げ。3トレンチ遺物出土状況平板実測。
- 2月 1日（水） 2，4，5トレンチ掘り下げ。1トレンチ土層断面実測。5トレンチ遺物出土状況平板実測。2，5トレンチ土層断面線引き。
- 2月 2日（木） 2～5トレンチ掘り下げ。2，5トレンチ土層断面実測。3，4トレンチ土層断面線引き。2，4，5トレンチ完掘。
- 2月 3日（金） 3トレンチ掘り下げ。3，4トレンチ土層断面実測。3トレンチ完掘。
- 2月 6日（月） 実測・写真撮影関係の図面整理作業。
- 2月 7日（火） 1～3トレンチ埋め戻し作業。写真撮影。
- 2月 8日（水） 4，5トレンチ埋め戻し作業。写真撮影。実測、写真撮影など全作業を完

了。撤収。

◎発掘調査は、平成8年11月16日から12月5日まで実施した。その間の調査の経過と概要については日誌抄をもってかえる。

- 11月16日（木） 用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。
資材テント部分の伐採作業。重機による表土剥ぎ。現況が杉林であつたため、樹根の取り除き作業。
- 11月17日（金） 重機による表土剥ぎ。樹根の取り除き作業。I-A, I-B, I-C
II-A, II-B, II-C区調査グリッド設定。海拔高レベル移動。
- 11月20日（月） 重機による表土剥ぎ。樹根の取り除き作業。II-A, II-B区III, IV
層（遺物包含層）掘り下げ。遺物出土状況平板実測、写真撮影。
↓
- 11月24日（金）
- 11月27日（月） I-A, I-B, II-A, II-B区III, IV層（遺物包含層）掘り下げ。
↓ 遺物出土状況平板実測、写真撮影。縄文時代早期確認トレンチ掘り下
げ。重機による廃土運搬。
- 12月 1日（金） I-B, I-C, II-B, II-C区III, IV層（遺物包含層）掘り下げ。
遺物出土状況平板実測、写真撮影。完掘。平板により等高線作成。
全行程終了。撤収。
- 12月 5日（火）

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境

第1節 遺跡の位置

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向かって約24kmで、南北に細長く延びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは、宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは、末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり、岩礁海岸を形成している。尚、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘帶上に立地している。これは約6000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、山地と台地、それに河川に沿って小規模に発達した沖積低地に大別出来る。

北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる、南部珂山系の西端域となっている。

シラス台地は並行して南流する中小の河川の活発な侵食作用によって、深い谷で分断され、さらにその支流によって、樹枝状に拡がる谷頭侵食で細かく刻み込まれておらず、大小幾多の台地が形成されている。また、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる河川は、西側を延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には串間市より大矢取川が入り込んでいる。またこれらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約200箇所の埋蔵文化財遺跡の多くは台地上に立地しているが、内陸山間部では、山稜に付随するそれぞれ独立した小規模な山麓舌状台地基部（谷あいの湧水を利用するタイプ）、あるいはその辺縁部（台地下の河川を利用するタイプ）に立地しており、南部の広域な台地では、水源に遠い台地中央部に遺跡の立地は見られず、これらの辺縁部、もしくは台地に付隨する河岸段丘上に集中している。

第2節 八野地区の周辺遺跡

第1図に掲げた前川流域の各々の遺跡について、確認調査の出土遺物や分布調査などにより採集された遺物をもとに若干説明をすることとする。

遺物番号①和田遺跡や②の姥ヶ谷B遺跡では弥生時代の土器片が採集されている。

④の井手平遺跡は池野台地の東側に位置する遺跡である。昭和58年に確認調査が実施され、縄文時代早期を中心とする遺跡であることが判明した。2基の集石遺構と前平式土器を中心とする土器・石器等を検出した。また旧石器時代の細石核も出土している。

⑤の八郎ヶ野B遺跡は池野台地に位置する遺跡で、確認調査により旧石器の剥片をはじめとして縄文時代晩期の土器やこの時期の遺構と考えられるピットが検出された。このことによつて旧石器時代から縄文時代にかけて、各時代が複合する遺跡であることが判明した。

⑦の池野遺跡は昭和58年に確認調査が実施され、春日式土器をはじめとして縄文時代中期～後期に位置づけられる土器・石器が出土した。

⑧の倉園B遺跡は昭和58年に発掘調査が実施された。住居跡遺構をはじめとして集石遺構配石遺構、連穴土括等が検出された。特に連穴土括の検出例は県内でも少なくその機能についても判明していなかった。しかしながら、瀬戸口望氏はこの連穴土括の機能を燻製に求めその可能性を指摘した。このことは最近桙ノ原遺跡の発掘調査において科学的な分析によって裏づけられるかたちとなつた。

⑨の倉園A遺跡は確認調査が実施され、縄文時代後期の指宿式を中心とする遺跡であることが判明した。また、県内でも出土例の少ない大平式土器も多量出土した。

⑩の十文字遺跡は、縄文時代中期後半より縄文時代後期前半へかけての遺跡であることが昭和57年の確認調査で判明した。出土遺物は阿高式系、岩崎下層式、指宿式などに代表される土器や石鎌、石斧、剥片、石包丁状石器等が出土した。

八野地区的埋蔵文化財は旧石器時代から弥生時代までそれぞれの各時代が存在しているようである。今後、未調査の遺跡について発掘調査が実施され、遺跡の立地と地理条件やその性格について多くの示唆を得られるかもしれない。

番号	遺跡名	時代
①	和田	弥生
②	姥ヶ谷B	縄文・弥生
③	姥ヶ谷A	弥生
④	井手平	旧石器・縄文
⑤	八郎ヶ野B	縄文(晚期)
⑥	八郎ヶ野A	縄文(晚期)
⑦	池野	縄文(後期)
⑧	倉園B	旧石器・縄文
⑨	倉園A	縄文(後期)
⑩	十文字	縄文(後期)
⑪	八郎ヶ野	縄文

第1表 周辺の遺跡



第1図 周辺の遺跡

第 III 章

各トレーナーの調査

第Ⅲ章 各トレンチの調査

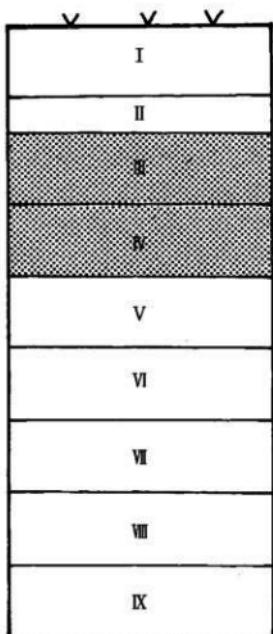
第1節 調査の概要

倉園C遺跡は、台地の辺縁部に位置する遺跡である。

確認調査は、事業対象地区となる道路に沿って遺跡の範囲・性格等を把握するために実施した。対象地区は、現況が急傾斜となっており、作業員の安全を考慮して、平坦面を中心に 2×3 mを基本として計5ヶ所設定した。

第2節 基本層序

倉園C遺跡の層位は、IX層に分層することができる。現況が傾斜地であるため、場所によつては観察されない層も存在した。



I層 腐食土。色調・硬さなどにより、a, b層に細分できる。

II層 黒褐色土層：弥生時代の時期が考えられる。

III層 黄褐色土層：御池カルデラに起源をもつ火山灰を包含する。

IV層 暗黄橙色土層：『アカホヤ』の二次堆積と考えられる。

V層 黄橙色土層：鬼界カルデラに起源をもつもので、いわゆる『アカホヤ』とよばれるものである。

VI層 青灰色土層：縄文早期の遺物包含層で、a, b, c, dの4層に細分できる場所もある。

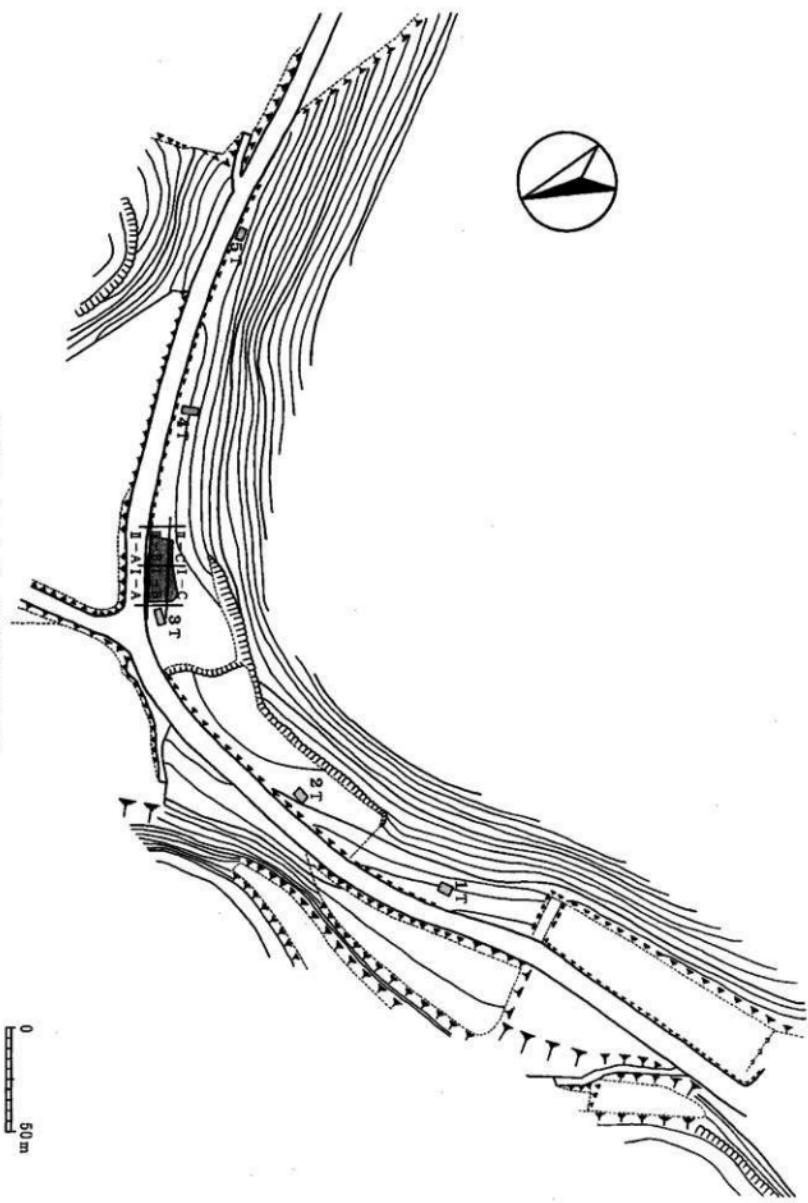
VII層 乳橙色土層：桜島に起源をもつもので、いわゆる『サツマ』とよばれるものである。

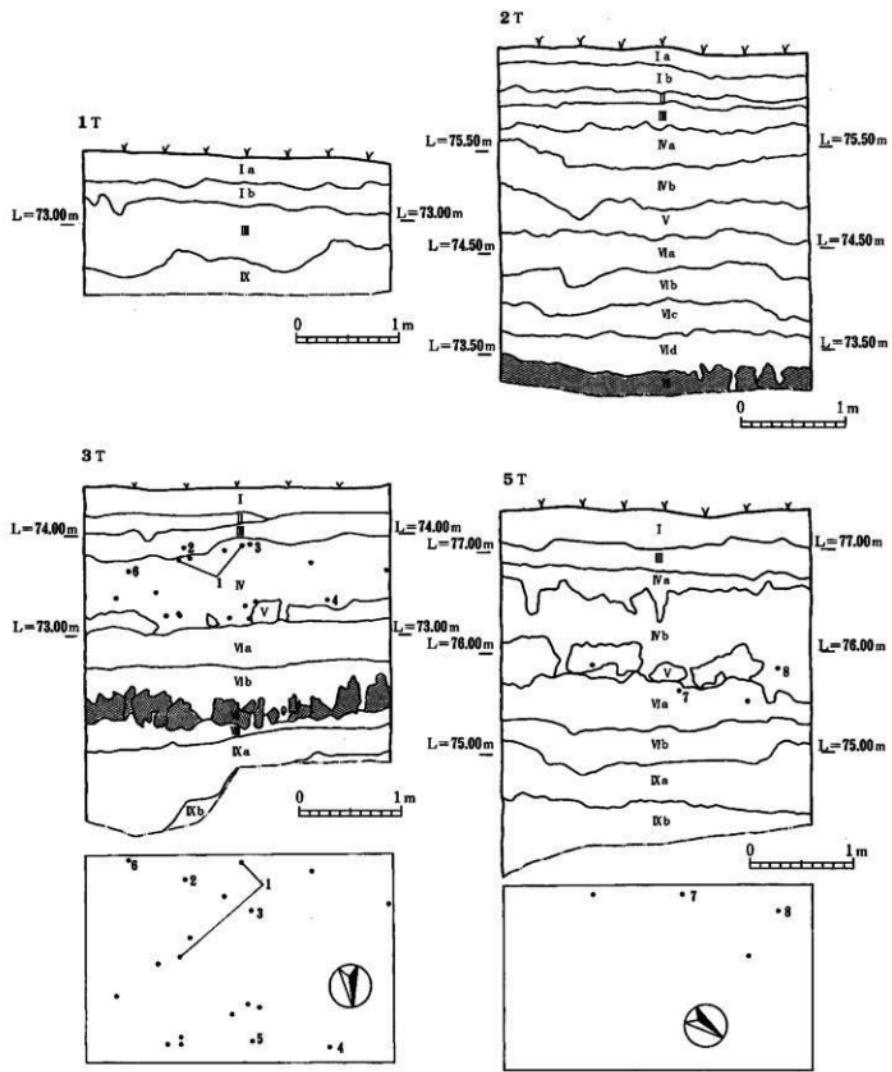
VIII層 茶褐色土層：非常に硬質な層である。

IX層 白灰色土層：『シラス』であるが、下部は砂利を多量に含む層となる。

第2図 土層柱状模式図

第3図 トレンチ・発掘調査記録図





第4図 トレンチ断面図・平面図

第3節 各トレンチの調査

第1トレンチ (第4図)

調査区西端、標高約73.5mの荒地に2×3mの大きさで設定した。Ⅲ層の下位層はシラスで遺物・遺構とも確認されなかった。

第2トレンチ (第4図)

2トレンチは1トレンチの北側、標高約76mの微高地に2×3mの大きさで設定した。層の堆積は良好であったが遺物・遺構とも確認されなかった。

第3トレンチ (第4図)

3トレンチは2トレンチの東側、標高約74.5mの荒地に2×3mの大きさで設定した。Ⅲ、Ⅳ層の遺物包含層より縄文時代前期～晩期の遺物が数点出土した。

第4トレンチ

4トレンチは3トレンチの東側、標高約75mの微高地に2×3mの大きさで設定した。層の堆積は良好であったが遺物・遺構とも確認されなかった。

第5トレンチ (第4図)

5トレンチは4トレンチの東側、標高約77mの微高地に2×3mの大きさで設定した。VI層より縄文時代早期の土器が数点出土した。

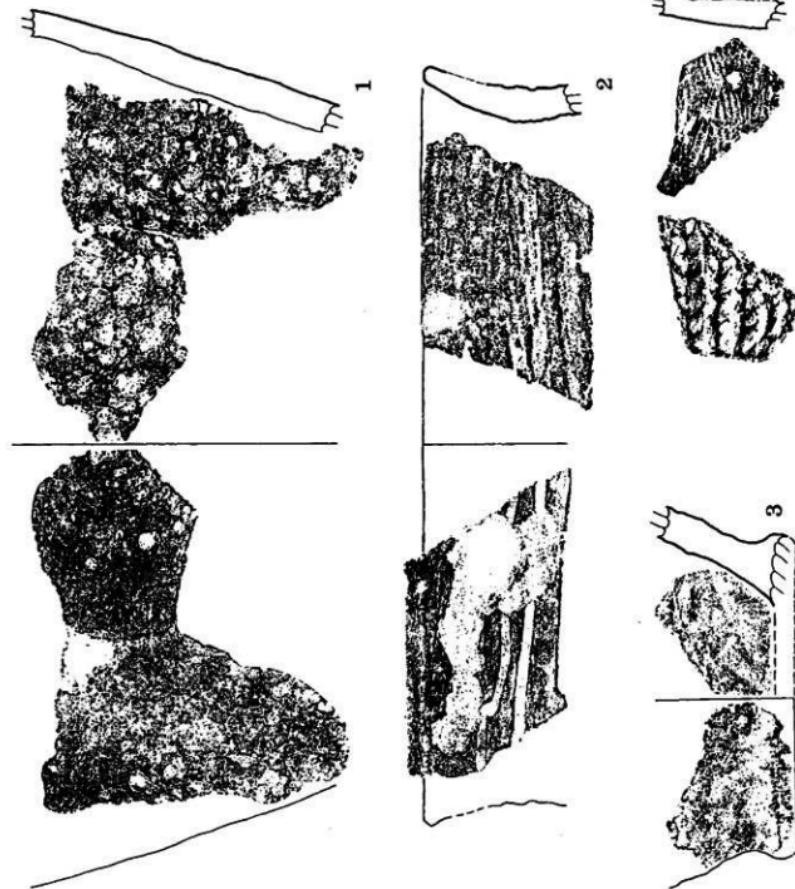
第4節 トレンチ出土遺物 (第5図-1~10)

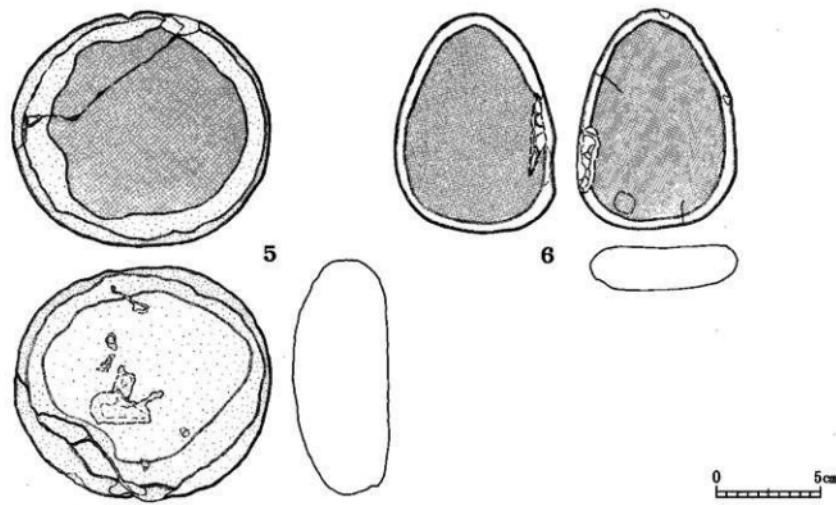
1は底部近くの胴部破片と考えられるものである。外面は丁寧なナデ調整であるが、内面は摩滅著しい。2は外反する口縁部である。外面が剥離しているが、平行の細形凹線文が認められるものである。3は端部がやや張り出す底部片である。胎土・焼成などから縄文時代後期のものと考えられる。4は断面三角形状の隆起突帯を貼りつけるものである。隆起突帯はいわゆるみみずばれ状につまみあげるもので、指頭痕が認められる。5は円碟を用いた石器で、磨る、叩きの両方の機能がうかがえる。6は両面に磨面が認められ、比較的薄い碟を使用している。

7は外反する口縁部である。縦位の撲糸文と横位の浅い3本単位の凹線文が認められる。8は頸部破片で縦位に撲糸文を施した後、浅い凹線文を施文するものである。9、10は小形の磨石と考えられるもので、両面に磨面が認められる。

第5図 トレンチ出土遺物(1)

5cm
0





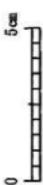
第6図 トレンチ出土遺物（2）

第5節まとめ

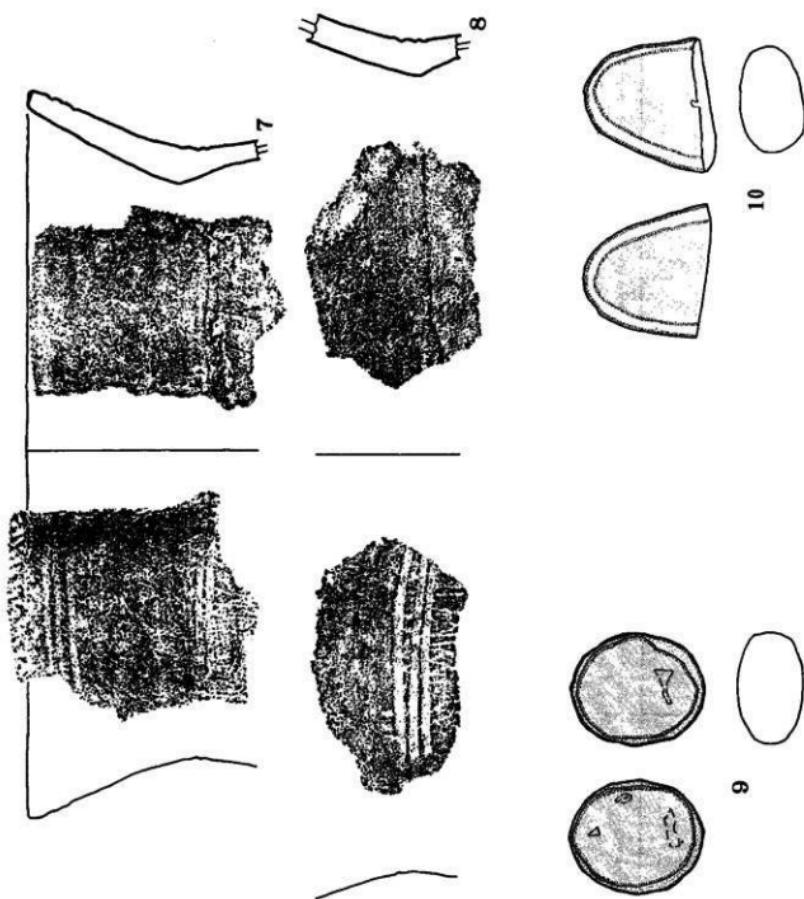
倉園C遺跡は、台地の辺縁部に位置する遺跡である。確認調査では、地形等を考慮して1～5トレンチを設定して実施した。その結果、3、5トレンチでは遺物包含層が認められ土器・石器が出土した。2、4トレンチでは包含層と考えられる層は認められたが遺物は出土しなかった。1トレンチでは旧地形が変化しており、遺物などはまったくみられなかった。

この結果、遺跡は3トレンチを中心とする範囲と考えられる。急傾斜地であるために5トレンチの遺物については流れ込みの可能性が強い。

時期は3トレンチでは縄文時代前期～晩期の土器であり、5トレンチは縄文時代早期が考えられる。



第7図 トレンチ出土遺物（3）



第 IV 章

発掘調査

第1節 発掘調査の概要

確認調査の結果、3トレンチと5トレンチより遺物が出土したため、この部分を中心にして発掘調査を実施することとなった。

確認調査の3トレンチを中心として遺物の出土状況を考慮しながら拡げていき、I-A I-B, I-C, II-A, II-B, II-C区のグリッドを設定した。現況が杉林であったため、樹根とI, II層については重機による表土剥ぎを行い、III～VI層については人力で掘り下げた。III, IV層が遺物包含層で土器・石器が出土した。

第2節 出土遺物

1.出土土器

III, IV層の遺物包含層から出土した土器を形態上の特徴からI類（縄文晩期）、II類（縄文後期）、III類（条痕文系）、IV類（隆起突帯）、V類（隆起突帯+刺突文）のI～V層土器に便宜上、類別した。

2.I類土器（第10図-1, 2）

1は外反する口縁部である。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。2は組織文土器である。

3.II類土器（第10図-3～11）

3～5は太形四線文を施すものである。6は竹簀文と四線文で文様構成するものである。7は無文であるが、穿孔されている。8は細形の平行四線文を施される胴部片である。

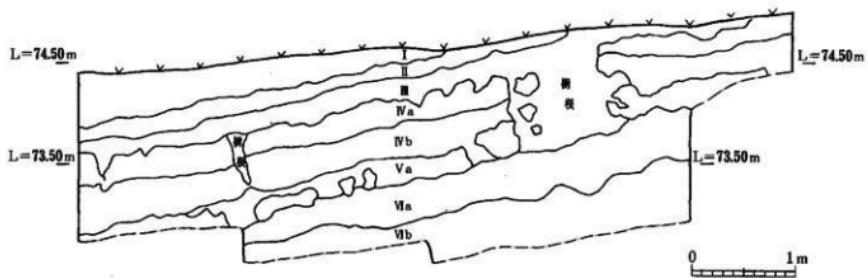
9～11は貝殻復縫による条痕文が認められるものである。9は平行凹線で鋸歯文や波状文を施すもので、内面にも凹線文が観察される。内外面とも条痕が認められる。10, 11は外面のみに条痕文が認められ、内面は条痕ナデ仕上げである。

4.III類土器（第13図-12～19）

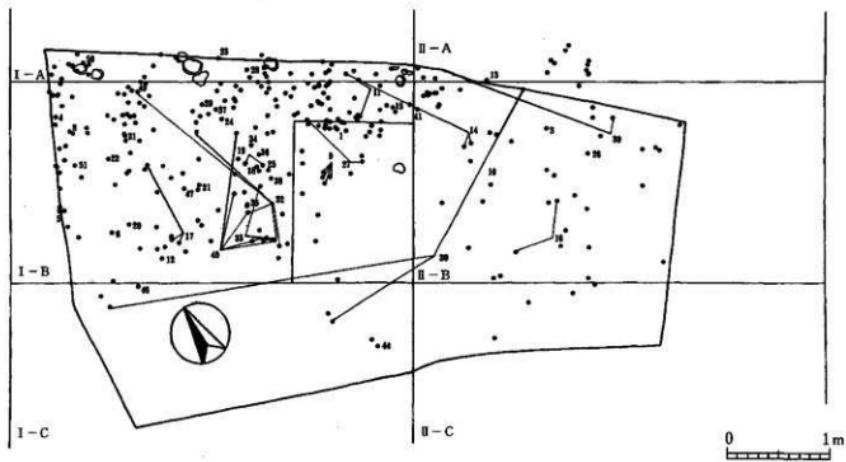
12～19は条痕文系の土器と考えられるものである。12～14はいづれも外反する口縁部である。13, 14は比較的薄手のものである。15は外面は縦位に内面は横位に条痕が認められる。16は内外面とも比較的細かい条痕が認められるが、17は荒いものである。18, 19は底部近くの破片で、18は尖底になるようである。

5.IV類土器（第15図-20～31）

20～22はやや外反する口縁部で、隆起突帯を波状に巡らすものである。内外面ともに条



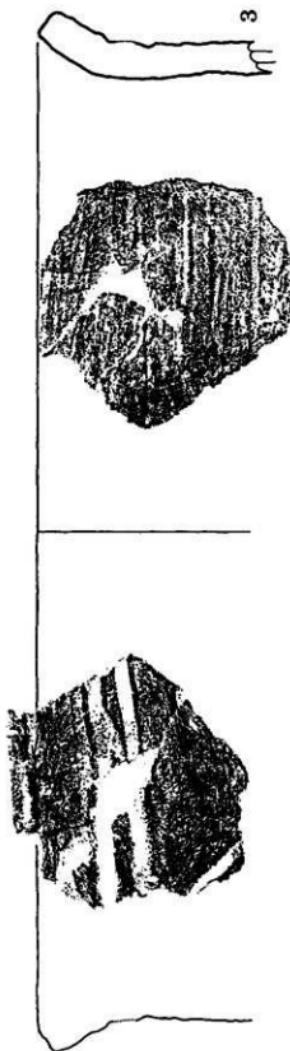
第8図 哉畔土層断面図



第9図 遺物出土状況平面図

第10圖 Ⅰ・Ⅱ類土器実測図

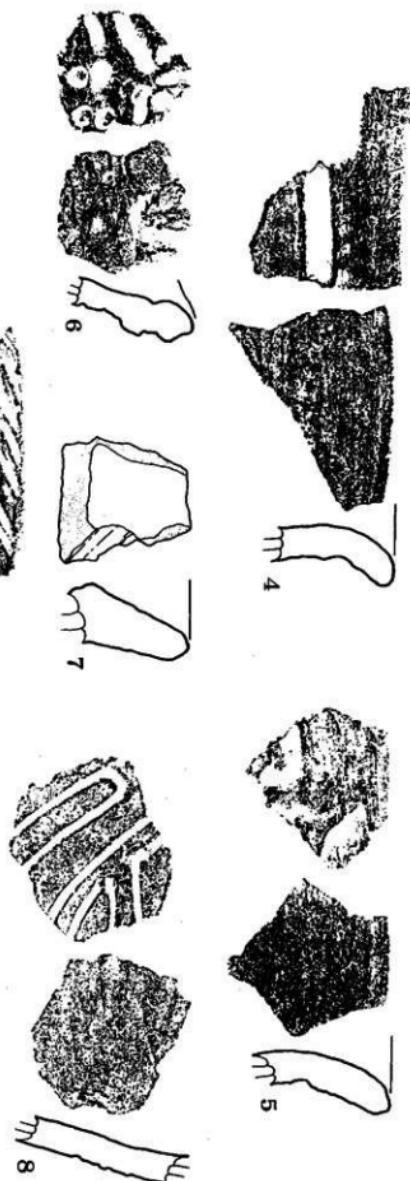
5cm
0

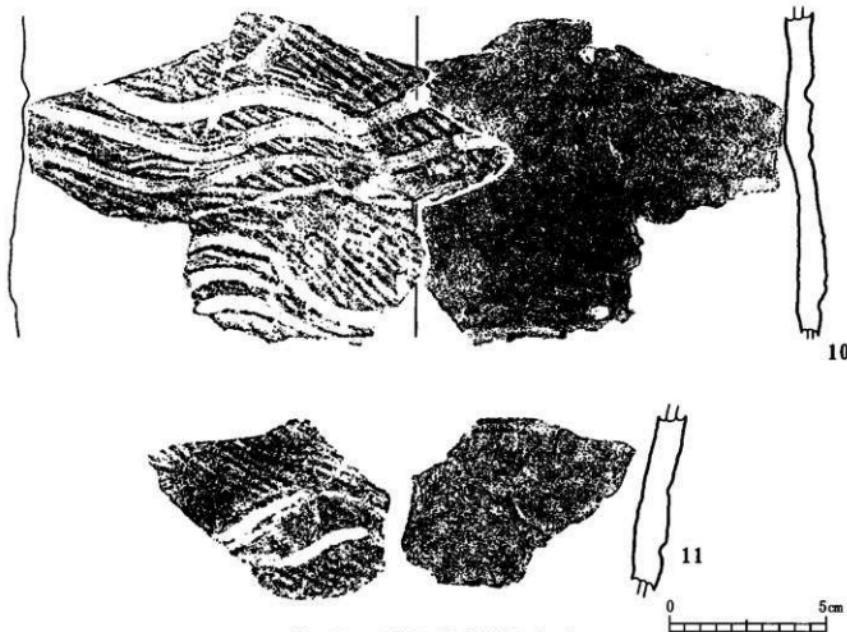


第11圖 II 粘土器実測図 (2)



0
5cm





第12図 II 類土器実測図 (3)

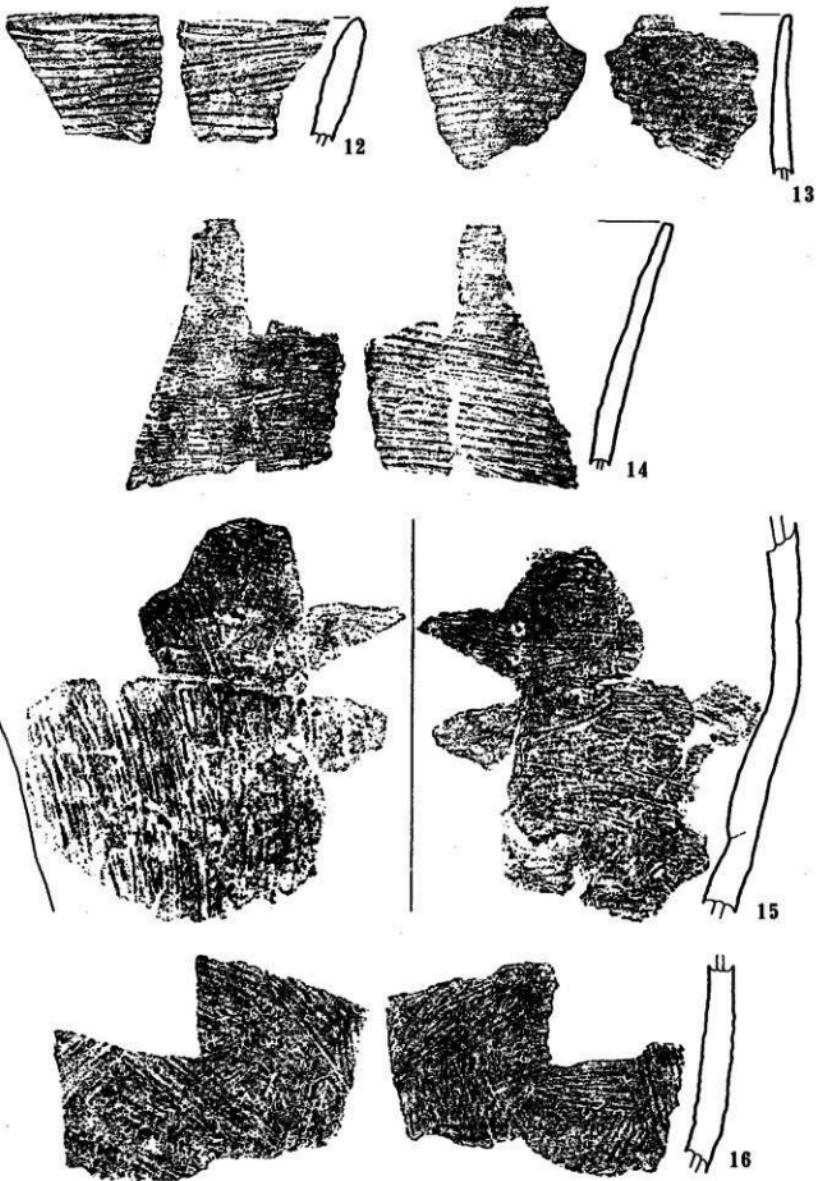
痕が残る。20, 21は口唇部に刻目を有するもので、みみずばれ状の隆起突帯を指頭によりつまみあげて貼りつけるものである。21は口唇部に刻目をもたない。23は摩滅しており、荒い条痕が残る。24, 25は断面三角形状の隆起突帯が認められる。

27~30は隆起突帯の断面がやや丸みをもつものである。27は円弧状の隆起突帯が認められる。28は条痕を残さず、ナデ仕上げである。30は破片上端に隆起突帯が認められるものである。内外面とも荒い条痕が残り、外面には多量のススが付着している。31は隆起突帯を縦位に施すが、摩滅している。

6.V 類土器 (第17図-32~41)

32~35は刺突文と垂下状の隆起突帯で文様構成するものである。内外面とも荒い条痕が残る。36, 37は垂下状の刻目隆起突帯が認められないが、隆起突帯間の破片と考えられる。

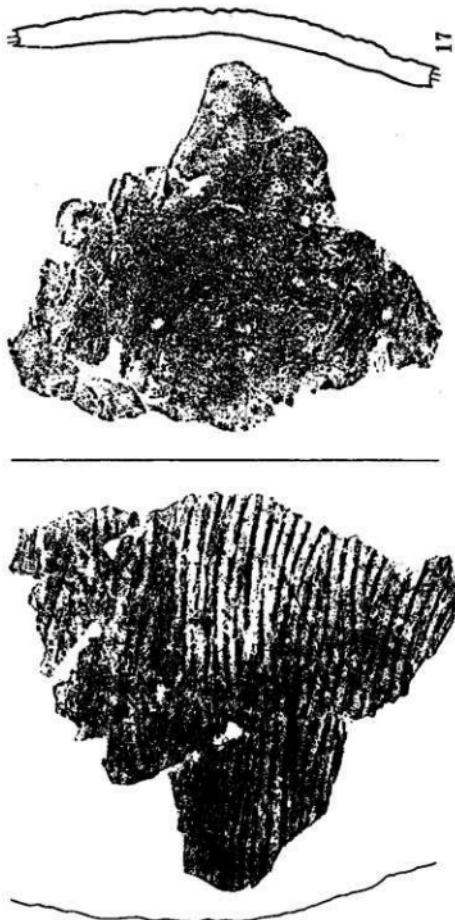
38~40は横位に幾何学状の細形凹線文を施すものである。38の隆起突帯は刻目となるが、39は刻目にならない。40は胴部から内湾気味に立ち上がるるものである。胴部の屈曲部分は明瞭である。41は円形状の隆起突帯が認められる。

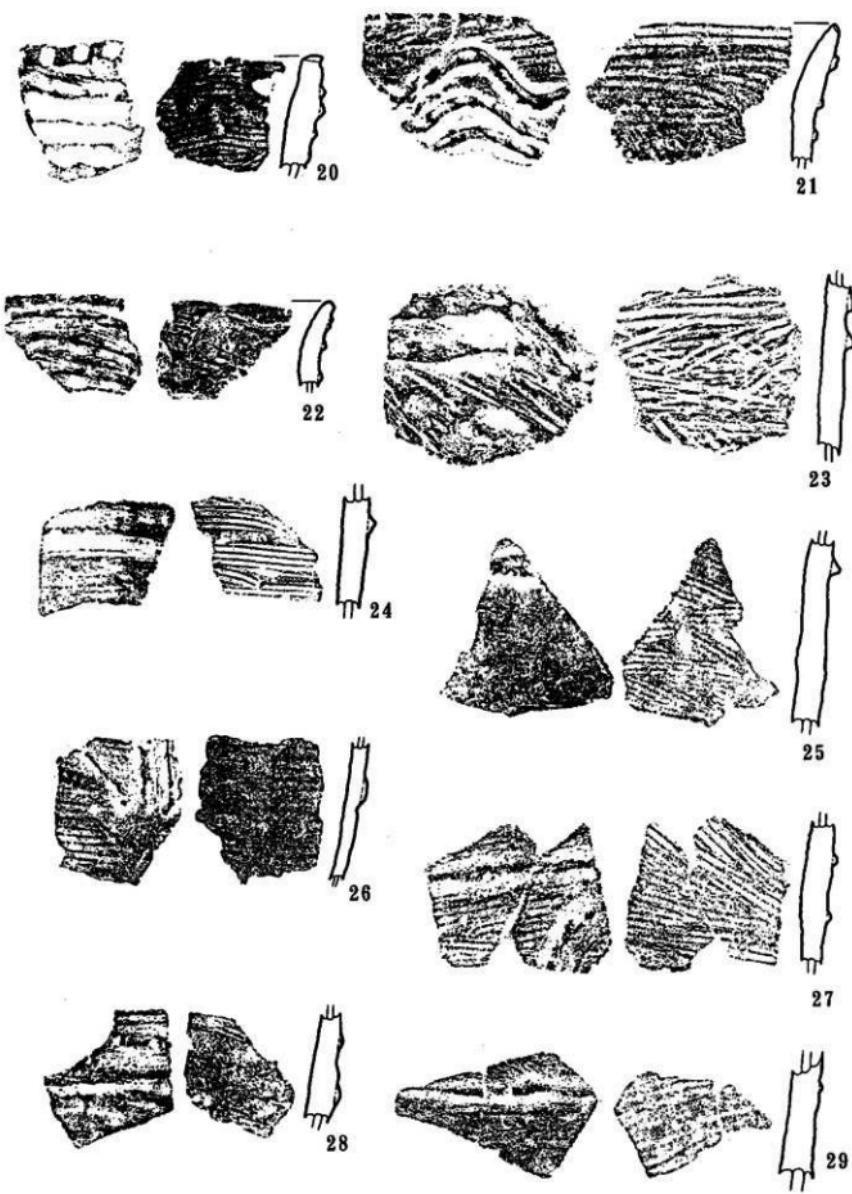


第13図 III類土器実測図 (1)

0 5cm

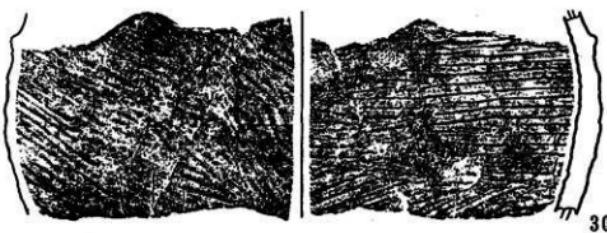
第14圖 三類土器素測圖 (2)



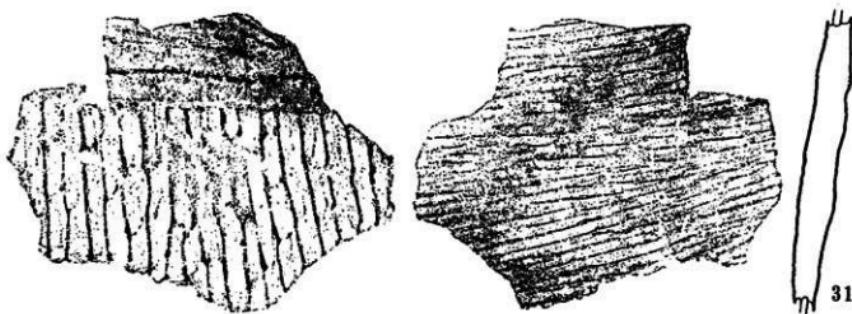


第15図 IV類土器実測図(1)

0 5cm

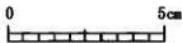


30



31

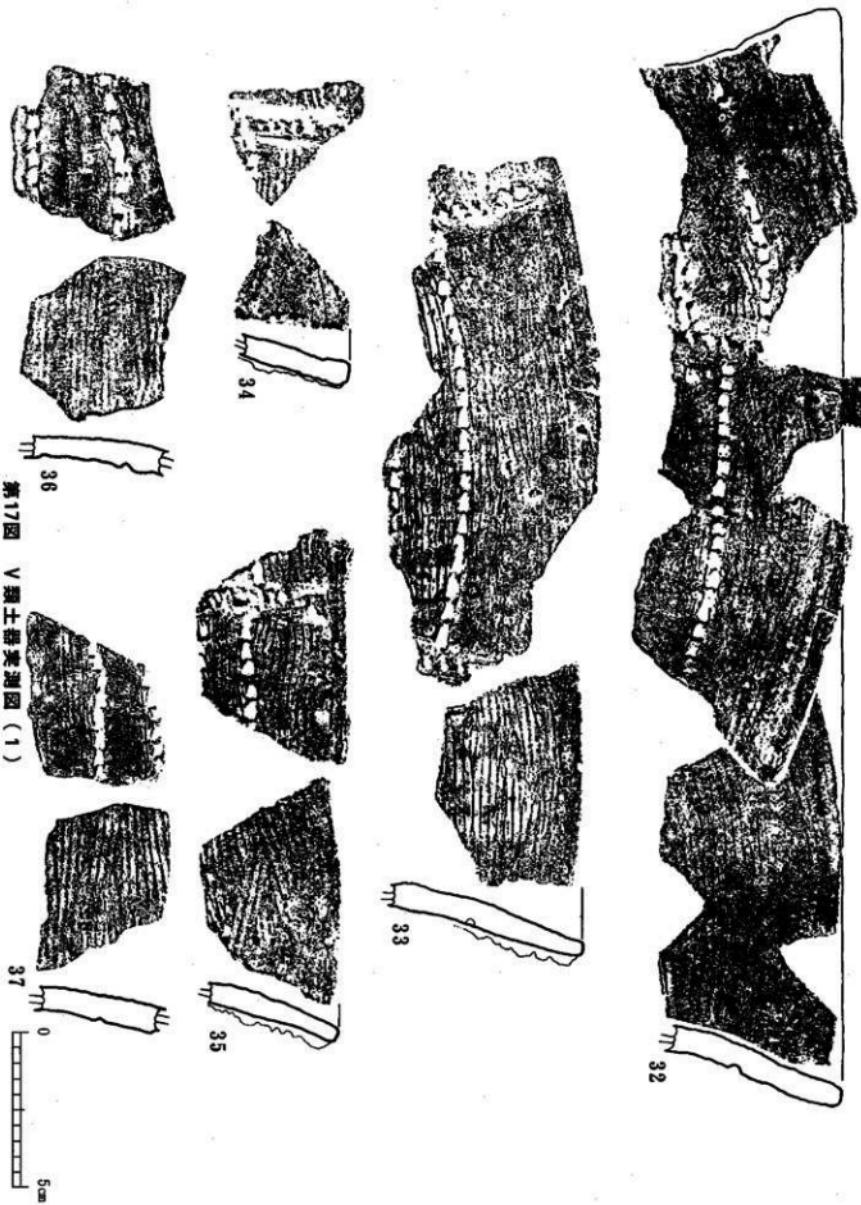
第16図 N類土器実測図(2)



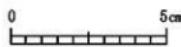
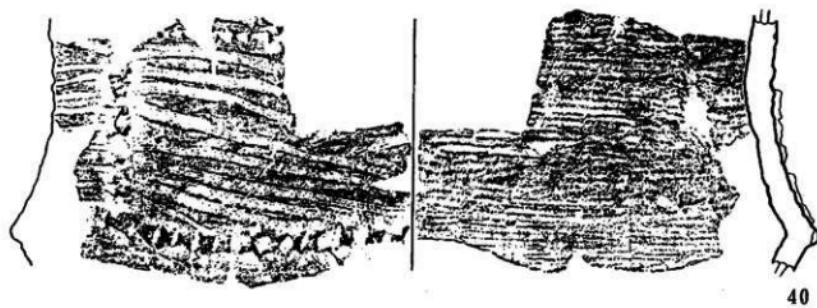
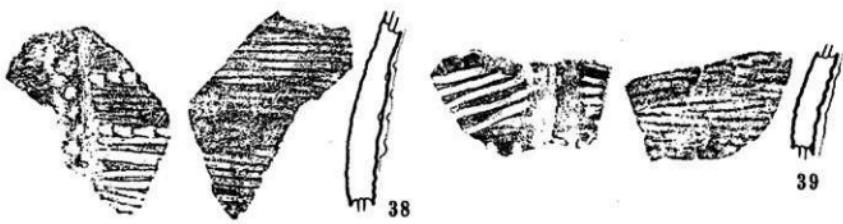
7.出土石器（第19図-42～51）

42、43は磨製石斧と考えられるものである。42は基部から刃部に向かって太くなるもので、断面は梢円形となる。胸部から刃部が破損している。43は基部から胸部が破損している。刃部に使用痕が残る。

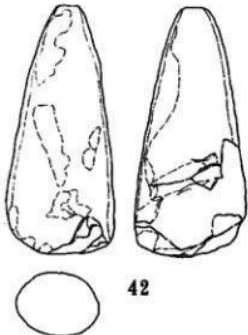
44～49は磨石・敲石である。敲打痕と磨面の両方が認められるものも存在しており、両方の機能が考えられる。44は円碟を用いているが、45、47は板状の円碟を使用している。46の片面は叩きとしての機能がみられ、片面は磨面が観察される。49は小形の円碟を利用した敲石で、使用痕が認められる。50、51は全面に磨面が認められるもので、砥石（？）的な機能をもつものかもしれない。



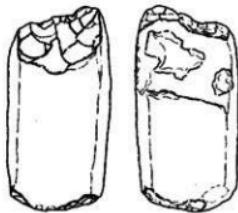
第17圖 V形土器殘片圖 (1)



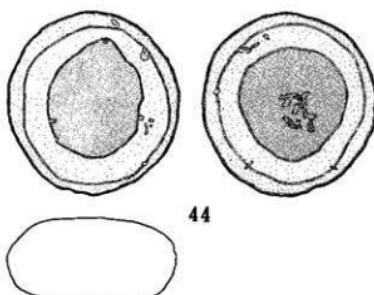
第18図 V類土器実測図（2）



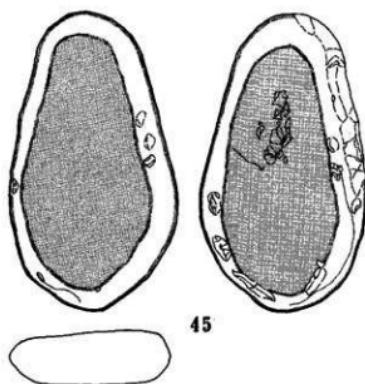
42



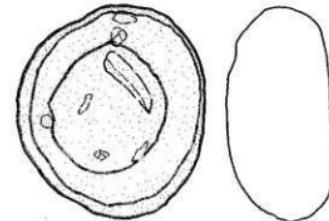
43



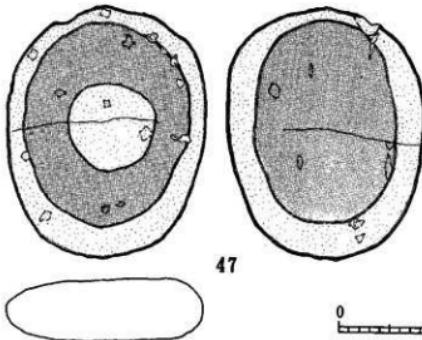
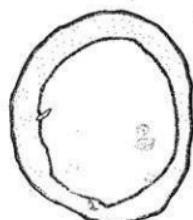
44



45

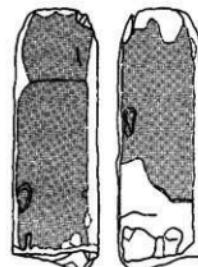
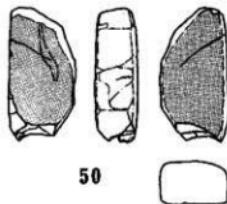
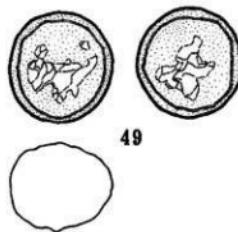
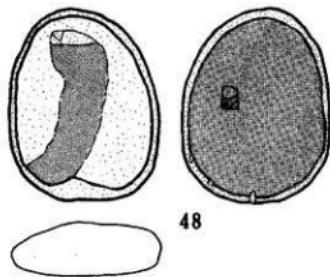


46



47

第19図 石器実測図（1）



0 5cm

第20図 石器実測図（2）

第2表 出土土器觀察表

発掘番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調整	焼 成	備 考
第 5 図	1		3 T . III	角閃石・石英・金雲母	黄褐色	ミガキ	良好	内面擦減・スス付着
	2		3 T . II	角閃石・石英・金雲母	暗茶褐色	条痕	良好	スス付着
	3		3 T . II	角閃石・石英・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	スス付着
	4		3 T . IV	角閃石・長石	茶黒褐色	ナデ	良好	
第 7 図	7		5 T . VI b	角閃石・長石・石英	淡茶褐色	ナデ	良好	摩減
	8		5 T . VI a	角閃石・長石・石英	茶褐色	ナデ	良好	

第3表 土器觀察表

擇選番号	番号	類別	区・層	胎 土	色 調	調 整	焼 成	備 考
第 10 図	1	I	I - B - III	角閃石・長石・石英	黃褐色	条痕	良好	
	2	タ	- 括	角閃石・長石・金雲母	暗褐色	荒いナデ	良好	
	3	II	II - B - III	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	摩滅・スス付着
第 11 図	4	タ	I - B - IV	石英・金雲母	暗茶褐色	条痕	良好	スス付着・砂粒
	5	タ	I - B - IV	長石・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	スス付着
	6	タ	I - B - IV	角閃石・長石	暗茶褐色	ナデ	良好	
第 12 図	7	タ	- 括	長石・石英・金雲母	淡茶褐色	ナデ	良好	特殊な飾り付け
	8	タ	I - B - III	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	ナデ	良好	
	9	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶褐色	条痕	やや不良	粘土の雜目・スス付着
第 13 図	10	タ	I - B - IV	角閃石・長石・石英	茶褐色	条痕	良好	スス付着
	11	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶褐色	条痕	良好	スス付着
第 14 図	12	III	I - B - III	角閃石・長石・石英	茶褐色	条痕	やや不良	
	13	タ	II - A - IV	角閃石・長石	暗茶灰色	条痕	良好	スス付着
	14	タ	II - B - III	長石・石英・金雲母	黒褐色	条痕	良好	
第 15 図	15	タ	I - B - IV	角閃石・金雲母	淡茶褐色	条痕	やや不良	スス付着
	16	タ	II - B - IV	角閃石・長石・金雲母	褐色	条痕	良好	綾杉状条痕
	17	タ	I - B - IV	角閃石・長石・石英	暗褐色	条痕	良好	スス付着
第 16 図	18	タ	I - B - IV	角閃石・長石	黃褐色	条痕	やや不良	尖底(?)
	19	タ	I - B - IV	角閃石・長石・石英	暗茶灰色	条痕	良好	スス付着
	20	IV	I - B - IV	角閃石・長石	黃褐色	条痕	良好	スス付着
第 17 図	21	タ	I - B - IV	角閃石・長石	黃褐色	条痕	良好	スス付着
	22	タ	I - B - IV	長石・石英	淡茶褐色	条痕	良好	
	23	タ	I - A - IV	角閃石・長石	淡茶褐色	条痕	良好	摩滅
	24	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶黒褐色	条痕	良好	スス付着
	25	タ	I - B - IV	角閃石・長石	黒褐色	条痕	良好	スス付着
	26	タ	II - B - IV	角閃石・長石	黒褐色	条痕	良好	
	27	タ	I - B - IV	角閃石・長石	淡茶灰色	条痕	良好	摩滅
	28	タ	I - A - IV	角閃石・長石	茶褐色	ナデ	良好	
	29	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶黒褐色	条痕	良好	
第 18 図	30	タ	I - C - IV	角閃石・長石	茶灰色	条痕	良好	スス付着
	31	タ	I - B - IV	角閃石・長石	茶黒褐色	条痕	良好	摩滅
第 17 図	32	V	I - B - IV	角閃石・長石・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	内面凹凸・砂粒
	33	タ	I - B - IV	角閃石・石英・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	
	34	タ	I - B - IV	角閃石・石英・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	
第 18 図	35	タ	I - B - IV	角閃石・石英・金雲母	黒褐色	条痕	良好	
	36	タ	I - B - III	角閃石・長石・金雲母	茶褐色	条痕	良好	スス付着
	37	タ	I - B - IV	角閃石・長石・石英・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	スス付着
第 18 図	38	タ	I - B - IV	角閃石・石英・金雲母	黒褐色	条痕	良好	
	39	タ	II - B - IV	角閃石・長石・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	スス付着
	40	タ	I - B - IV	長石・金雲母	茶黒褐色	条痕	良好	スス付着・砂粒
	41	タ	I - B - IV	角閃石・長石	黒褐色	条痕	やや不良	

まとめにかえて

今回対象となった地区はいづれも急傾斜であったためか人工的な遺構は検出されなかった。Ⅲ、Ⅳ層の遺物包含層から縄文時代前期～晩期の土器・石器が出土した。Ⅳ層は二次アカホヤと考えられ、出土遺物は流れ込みの可能性がある。

出土土器は形態上の特徴からⅠ～Ⅴ層に便宜上、類別した。Ⅳ、Ⅴ類土器が本遺跡の主体となる土器群である。

Ⅰ類土器は、縄文時代晩期の土器であると考えられるもので、組織文土器は黒川式期が考えられる。

Ⅱ類土器は、縄文時代後期の土器を一括した。条痕ナデ調整後、凹線文を外面に施すものがほとんどであるが、貝殻復縁による条痕を地文として利用するものも存在する。

Ⅲ類土器は、縄文時代前期の条痕文系土器と考えられるものである。器面に条痕を施すのみで他の文様はみられない。

Ⅳ類土器は、みみずばれ状の隆起突帯を貼りつけるものである。隆起突帯の断面形が三角形状のものと丸みをもったものの両方が存在するようである。縄文時代前期の轟B式と考えられる。

Ⅴ類土器は、刺突文と垂下状の隆起突帯で文様構成するものである。胴部屈曲部から口縁に至る部位外面に幾何学状の細形凹線文を施すものも存在する。Ⅳ類土器と同様に轟B式の範疇と考えられる。

出土石器は敲石・磨石が数点出土した。敲打痕と磨面が認められるものが存在し、両方の機能をもつものも存在した。また砥石（？）的な機能をもつ石器も出土した。

今回の調査により倉園C遺跡が縄文早期から晩期にかけての複合的な性格をもつ遺跡であることが判明した。

あとがき

倉園C遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。

調査対象地区の倉園は志布志町の中でも寒いところであった。加えて対象地区は一日中陽のあたらない場所であった。

地主の方々をはじめ各方面の方々に多大な御迷惑をかけたが、快く協力して頂き無事調査を終了することができた。

確認調査においては、近くで住宅火災が発生し、作業員の皆さんと飼われている牛を逃がすなど、火災の被害拡大を防いで大活躍であった。

最後になりましたが、我々と一緒にやって下さった発掘作業員・整理作業員の皆さんに心から感謝申し上げる次第であります。

発掘作業員

春口峯次 西川末広 山村又男 春口繁 春口稔 山村照男 山下重盛 藤崎安雄
又木 謙 春口フミエ 田之上鈴子 片村光子 水流トシ子 新堀ミヨ子 池添久子
下山エル 春口ノリ子 浜田まさ子 安楽えつ子 坪田和子 樽野次子 見野三千子
北村広子 柴洋子

整理作業員

上杉みゆき 樽野次子 北村広子 見野三千子 安楽えつ子 生重美恵子 恒吉栄子

写 真 図 版



遺跡遠景



遺跡近景



1 トレンチ土層断面



2 トレンチ作業風景



3 トレンチ作業風景



3 テレンチ遺物出土状況



4 トレンチ作業風景



5 トレンチ遺物出土状況



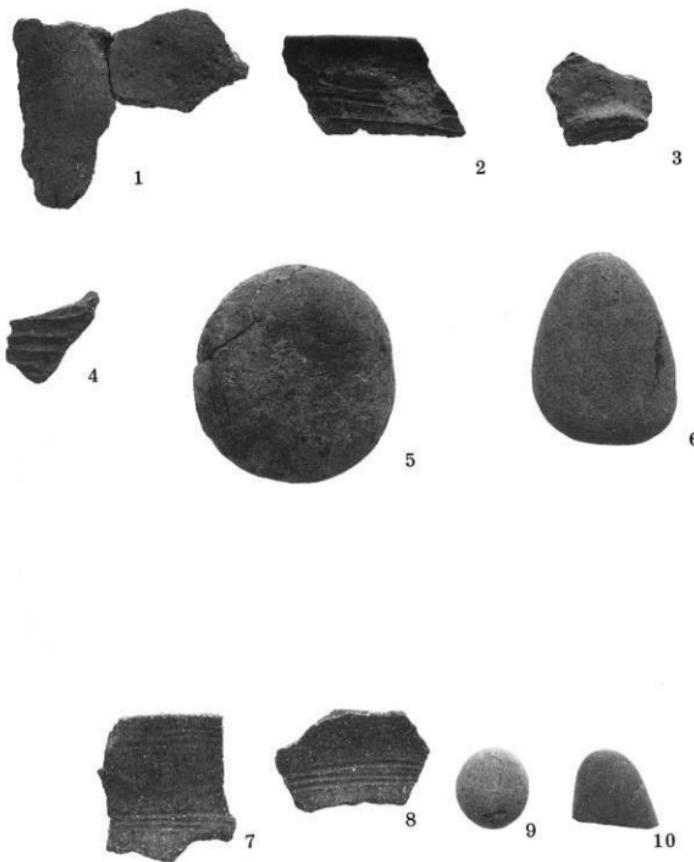
発掘調査畦群土層断面



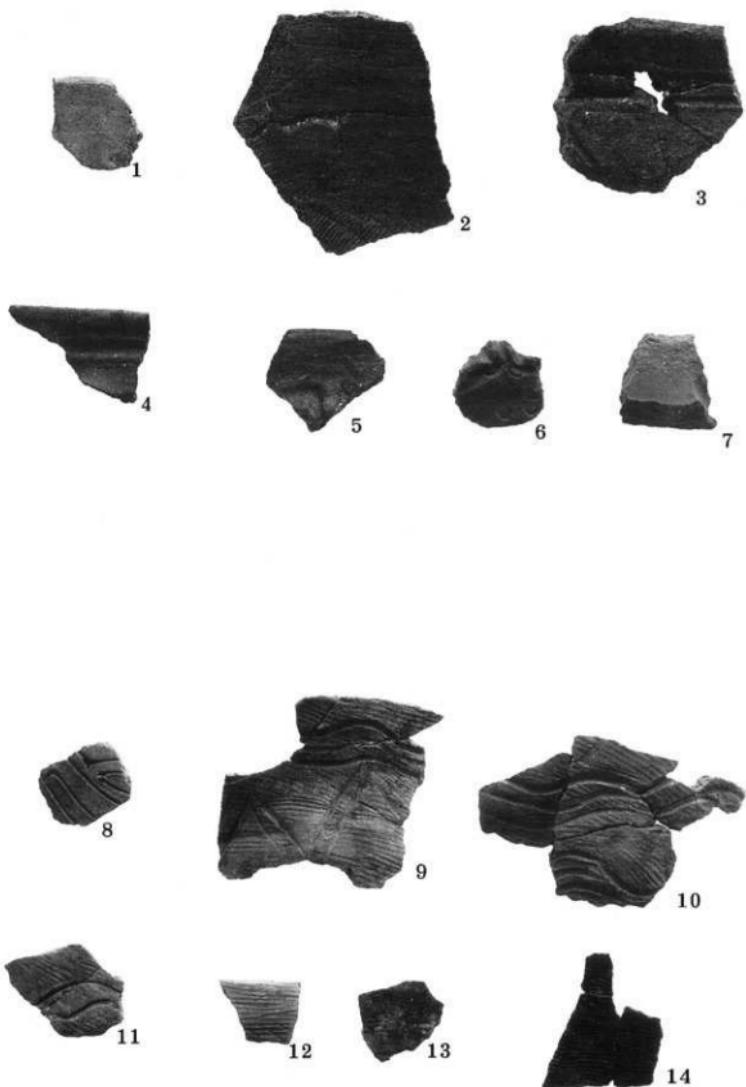
完掘状況（西から）



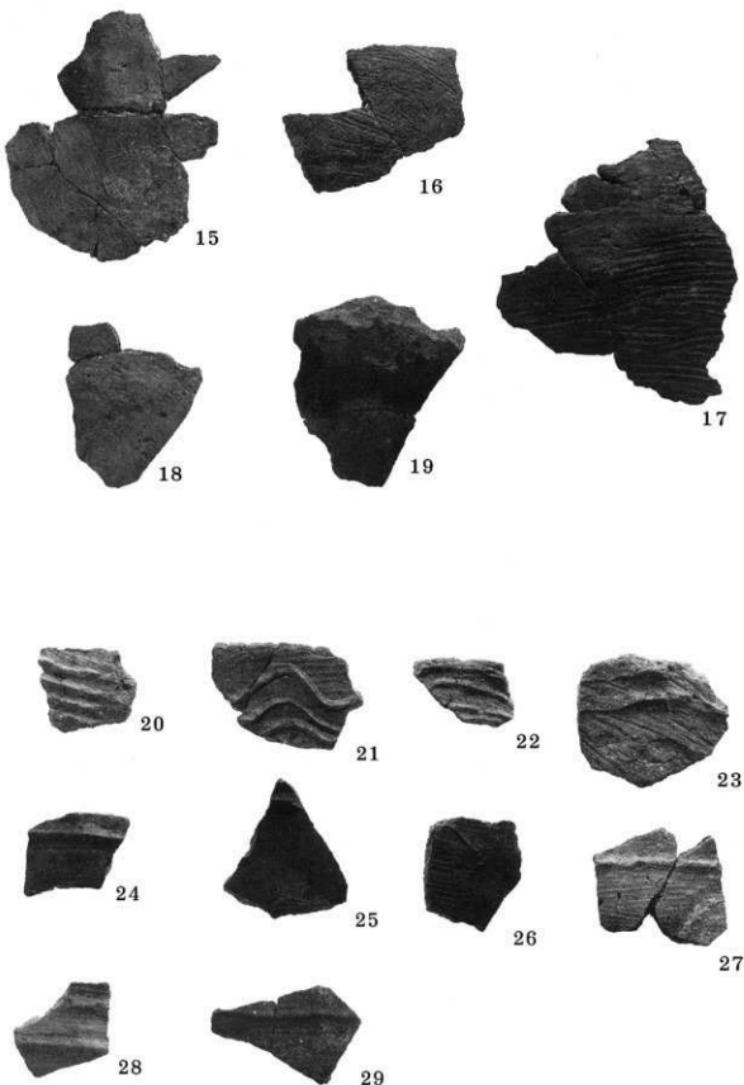
完掘状況（南から）



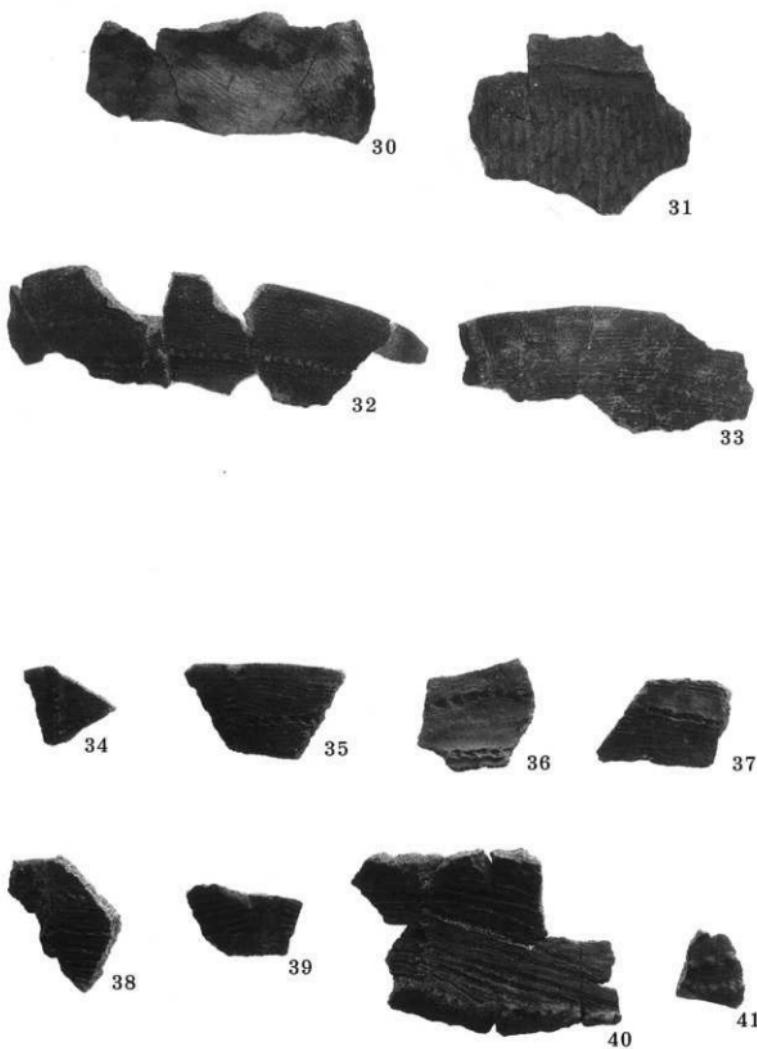
トレンチ出土遺物



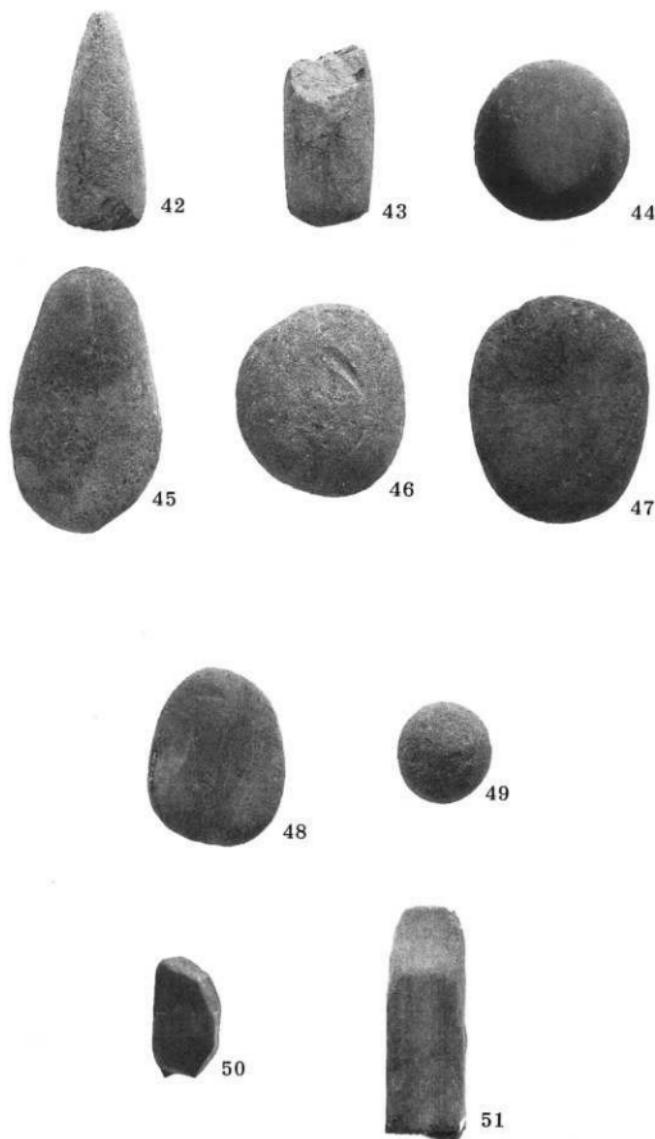
出土遺物（1）



出土遺物（2）



出土遺物（3）



出土遺物（4）

